石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第448号　令和3年2月1日発行

生誕140周年　熊谷守一展 ―わたしはわたし―

特別陳列 静けさが形となる時　西田藤夫　イタリア四十年

熊谷守一《牝猫》1959年　個人蔵
―「生誕140周年　熊谷守一展　―わたしはわたし―」より―

西田藤夫《夕暮れ時》2019年　個人蔵
―「静けさが形となる時　西田藤夫　イタリア四十年」より―

- 前田家の天神信仰【前田育徳会尊経閣文庫分館】
- 古九谷・再興九谷名品展【古美術】
- はこ・箱・hako　さまざまな素材とわざ【近現代工芸】
- 優品選【近現代絵画・彫刻】

- 展覧会回顧　企画展「いしかわの工芸　文化の深み　～わざの美　表現の美～」
- ミュージアムレポート　0才からのファミリー鑑賞会オンライン
- 2月前半の展覧会
- 2月の行事予定
- 友の会　次年度申込案内
- アラカルト ただいま展示中

第7・8・9展示室

北陸中日新聞発刊60周年記念

生誕140周年　熊谷守一展　―わたしはわたし―

主催：北陸中日新聞、石川テレビ放送、石川県立美術館
後援：石川県、金沢市、金沢市教育委員会、NHK金沢放送局、エフエム石川　特別協賛：東海東京証券

2月11日（木・祝）～3月14日（日）　会期中無休

単純な形態と明快な色彩によって構成される『モリカズ様式』で人々を魅了し続ける画人・熊谷守一（一八八〇～一九七七）。「画壇の仙人」、「超俗の人」など、世俗から離れたイメージで世に紹介されている熊谷は、明治・大正・昭和を貫く九十七年の生涯と七十年を超える画業を全うしました。

本展では熊谷がどのような人生を歩み、どのように絵と向き合ったのか、その真の像を改めて見つめなおします。画業を巡る上で欠かせない代表作と、近年になって所在が明らかになった逸品を中心に、油彩画・日本画などあるがままの「自分」を貫いた稀代の画人に迫ります。

関連行事

◆講演会「モリカズの世界―その画業と生き方」
講師：池田良平氏（本展監修、天童市美術館館長）
日時：二月十四日（日）午後一時三〇分～
会場：石川県立美術館ホール
定員：二〇〇名（自由席）
※事前申込み不要。本展のチケットをお持ちの方のみ入場可。就学前のお子様はご遠慮ください。

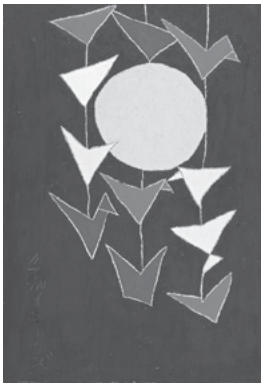
◆映画上映会「モリのいる場所」
山﨑努、樹木希林主演。熊谷守一とその妻秀子の生活を描いた沖田修一監督作品
日時：二月二十三日（火・祝）
①午前十一時～、②午後二時～（約一〇〇分）
会場：石川県立美術館ホール
定員：各回二〇〇名（自由席）

料金：五〇〇円／人（展覧会チケットとは別途）
※事前申込み不要。当日、受付にて展覧会チケットをご提示の上、映画観賞券をご購入ください。就学前のお子様はご遠慮ください。

◆観覧料
一般：一〇〇〇円（八〇〇円）
高校・大学生：八〇〇円（六〇〇円）
小・中学生：五〇〇（三〇〇）円
※（　）内は前売り料金および二十名以上の団体料金
※県立美術館友の会会員は団体料金。身体障がい者手帳、療育手帳、精神障がい者保健福祉手帳の交付を受けている方は前売り料金。付き添い一人は無料。

◆前売り券取り扱い場所
石川県立音楽堂チケットボックス、香林坊大和プレイガイド、アピタ松任ティオ、うつのみや書店、チケットぴあ（Pコード685-452）、ローソンチケット（Lコード51761）、セブンチケット、金沢中日文化センター（めいてつエムザ2F）、北陸中日新聞販売店、中日サービスセンター（北陸中日新聞本社1F）

◆お問い合わせ先
北陸中日新聞事業部
☎076（233）4642　（平日10時～17時）


《夏の月》1961年
埼玉県立近代美術館蔵

《いんげんに熊蜂》1961年

《ヤキバノカエリ》1956年　岐阜県美術館蔵

第4展示室【近現代絵画】　特別陳列

静けさが形となる時　西田藤夫　イタリア四十年

主催：石川県立美術館　後援：イタリア大使館

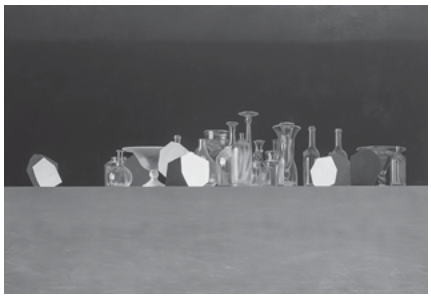
2月13日（土）～3月19日（金）　会期中無休

西田藤夫は神戸市に生まれ、金沢美術工芸大学油画科に学んだ石川ゆかりの作家です。昭和五十五年（一九八〇）に二十九歳でイタリアに渡り、ブレラ美術学校に学びます。当初、一、二年で帰国する予定が、芸術の国イタリアに魅せられ、その地で画業を続けることを志します。

これまでに、イタリアと日本を合わせて八十回を超える個展活動で、高い評価を得ており、公募展を中心に活躍する国内作家を主に取り上げてきた当館としては、本作家の経歴は異色といえます。鑑賞者が、受賞履歴や画壇での地位というフィルターを通さず、自らの眼を頼りに私財を投じる個展という舞台一本で活動してきたことに、画家の確かな自信を感じます。

西田藤夫氏が渡伊後、画業をかけて取り組んできたのは、静物画です。それも展覧会名が示すとおり、静けさを形としたような、静謐の世界です。イタリアに渡り、古典絵画からも多くを吸収した画業の初期から、遊びの要素を加えながら、静物画の可能性を追求した中期。そして、そこから新たな画境を拓こうとする円熟期の現在まで、自選三十七点で展観します。

四十年の画業に奢ること無く、自らの芸術を真摯に追求し続ける作品は、常にみずみずしさを失いません。一点一点時間をかけて向き合っていただきたい作品ばかりです。「絵を見ることが好き」と自認する方は、必見の展覧会です。



《硝子と紙片》2016年

学芸員の眼

日本の芸道では、その習得を表すのに「守・破・離」という言葉を用いることは、ご存知の通りです。あえて洋画家西田藤夫の画業を、守破離になぞらえるなら、渡伊当初は、見る物全てが新鮮で、カラヴァッジオをはじめとする古典からも多くを学んだ吸収期であり、イタリア芸術を師とした「守」の時期といえるでしょう。写実力が前面に出ています。そこに遊びの要素を加えながら、静物画の可能性を追求する時期に入ります。「守」から脱皮を図る「破」の時期です。そしていま、それらを凌駕し静物画に新たな地平を拓く「離」の時期を迎えているのではないでしょうか。回顧展は、一人の作家が辿る画業の道のりを、眺める楽しさに満ちています。

《ダミジャーナ》1982年

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田家の天神信仰

2月13日(土)～3月19日(金)　会期中無休

幼い頃から文武に優れ、やがて政務も任され右大臣にまで昇りつめた菅原道真は、左大臣藤原時平の讒言に遭い、大宰府に流されます。左遷が決まり、自邸の庭をながめながら詠んだ歌が、よく知られた「東風吹かば　にほひ起こせよ　梅の花　あるじなしとて　春を忘るな」です。(写真は紅梅別離の段)

その後、道真が「天満大自在天神」という神になること、復讐せんと延暦寺の僧尊意僧正の前に姿を見せること、時平のいる清涼殿に雷を落とすことなど、道真をめぐる様々な物語は、中世の時代から能や絵画、近世以降は文楽や歌舞伎の題材として人々に親しまれています。中でも、これらのエピソードと道真を祀る北野社建立の経緯を詞書と絵画で表したのが《北野天神縁起絵巻》で、各地の主要な天満宮・天神社に伝えられています。今回前田育徳会展示室尊経閣文庫分館で紹介するのは、鎌倉の荏柄天神社に伝わった《荏柄天神縁起絵巻》の上巻で、加賀藩五代綱紀の時代に前田家へ入りました。

「王城鎮守神々おほくましませと」で始まる荏柄本は、数ある天神縁起絵巻を詞書で分類した故梅津次郎氏によって、甲類の代表とされています。今回展示するのは、三巻のうち上巻で、第一段では菅原是善邸に現れた童子を子としたエピソードが絵画化されています。道真は是善の実子ですが、ここでは「どこからともなく現れた子」とすることで、道真の「神格化」が図られました。道真を神と崇める天神信仰は、広がっていくのです。

重要文化財《荏柄天神縁起絵巻》上巻（第九段　紅梅別離）

第2展示室【古美術】

古九谷・再興九谷名品展

2月13日(土)～3月19日(金)　会期中無休

加賀藩三代藩主・前田利常は、文化政策に注力しました。そこには、外様大名として幕府の警戒心を和らげる目的があったとも言われますが、利常の文化政策を知れば知るほど、警戒を和らげるどころか、逆に幕府を挑発しているようにも感じます。利常が晩年に取り組んだ、色絵磁器プロジェクトの成果である古九谷もそのひとつです。利常は、新たな芸術ジャンルとしての色絵に着目し、九州や京都の動向を注視していました。一六三七年に長崎に御買手を派遣したのも、名物裂や茶道具の購入のみならず、同年に有田を追放された陶工たちとの接触を図る目的があったと推測されます。

古九谷の特質は、大胆な意匠を厚い釉で描いていることですが、これは江戸では作ることができない色絵磁器にこめた、利常の反骨精神を具現化したものという見方もできます。そして一部の作品については、意匠の深意をキリスト教信仰から読み解く解釈もできます。近年の研究により、色絵の技術がキリシタンのネットワークを介して九州各地に伝えられたことが次第に明らかになってきましたので、九谷の地に技術を伝えた陶工も、その一員であった可能性を否定することはできません。

そこで利常は、幕府が禁止したキリスト教信仰をほのめかす意匠を、古九谷で展開することを支援したのではないでしょうか。このように古九谷は、美の高さにおいても、また意味の深さにおいても幕府に向けられた刃でした。この挑戦的な姿勢は、再興九谷諸窯にも継承され、飽くことなき表現の追究は今日も「九谷」の特質となっています。

石川県指定文化財《青手樹木図平鉢》古九谷

第5展示室【近現代工芸】

はこ・箱・hako

さまざまな素材とわざ

2月13日（土）～3月19日（金）　会期中無休

工芸作品は基本的に、用途があることを前提に制作されています。たとえば皿や鉢など食べ物を盛る器、茶碗や杯など飲用に用いる器などがあり、これを使おうと思いながら作品を観る方もあるでしょう。

さて今回の近現代工芸は、箱の作品を集めてご紹介します。蓋を開けたら全く印象の違う意匠が施されたもの、内と外のモティーフを併せて意匠が完成するものなど、素材を吟味し、持てる技術を駆使して、作者の豊かなイメージを形にした作品が揃っています。

展示は「箱」や「筥」、「匣」の文字が名称に含まれる作品に加え、蓋を開けて何かを中に納めるもの、という意味の「合子」といった、蓋付の器物作品から選びました。箱と言えば方形であることが多いですが、丸い形も多角形も、何かをかたどった形の箱もあります。また重箱や箪笥などの重ねる形体、手のひらにのる小さな箱など、様々な素材と技法の箱を紹介します。

箱作品の鑑賞は、蓋を開けた内部の様子が見どころの一つです。展示開催日から、当館公式ウェブサイトあるいは、石川県公式YouTubeチャンネル「Ishikawa Pref」において、関連企画（オンラインコンテンツ）「ハコをひらくと」を開催します。出品作品から選りすぐりの名品の、蓋を開けるところをじっくりと見ていただくものです。

公開予定作品は、富本憲吉《染付色絵菱文角箱》、寺井直次《金胎蒔絵漆箱「飛翔」》、氷見晃堂《栃造八稜箱》、筑城良太郎《栃造筋違菓子器》の四点です。展示と併せてお楽しみください。

寺井直次《金胎蒔絵漆箱「飛翔」》

第3・6展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選

2月13日（土）～3月19日（金）　会期中無休

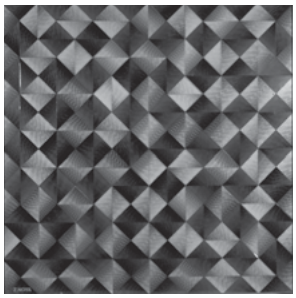
今年度最後の優品選になります。今世紀に入り、九・一一や三・一一では美術に何ができるかが問われました。令和三年もそのような年になりそうです。

さて日本画部門では第4展示室で開催中の「静けさが形になる時　西田藤夫　イタリア四十年」にちなみ、静物画の連作を展示します。こちらの作者は、京都画壇の東丘社で活躍した山本知克。画業後期の鳥瞰した異国風景を思い浮かべがちな作家ですが、抽象画や静物画なども精力的に研究した作家なのです。

油彩画からは埜谷次郎の《作品-6906-2》を紹介します。埜谷は大正二年松任に生まれ、金沢美術工芸専門学校研修生修了後、二紀展を中心に出品します。昭和三十一・三十三年褒賞、同三十八年同人賞を受賞しますが、四十五年に退会。その後渡欧し、セロファンやアクリルを用いた幾何学的抽象作品を制作しました。

彫刻からは、堀義雄《女の頭像》（昭和三十一年）を紹介します。本作は二紀展での二度目の発表となった作品です。くり抜かれた両眼と耳をもった異様な造形ですが、堀は穴をあけることによって、ものの外側だけでなく内側も想起できるように試みたといいます。空間やマッスを意識することで「実在」を表現するための探究がうかがえる作品です。

脇田和の版画作品から、衣服など身につけるものを描いた作品を紹介します。作品制作の材料や方法は無制限にあると述べている脇田ですが、このような身近なモチーフの自在な画面構成からは、作家の自由な時間での遊び心のようなものを感じ、新鮮な楽しみをもたらすことでしょう。



埜谷次郎《作品-6906-2》

展覧会回顧
企画展
「いしかわの工芸　文化の深み ～わざの美　表現の美～」

本展は当初の年間計画にはなかった展覧会ですが、新型コロナウイルス感染症の影響で予定されていた展覧会が延期となったことから、急遽、所蔵品を中心とした展示として企画しました。当館所蔵品のうち、近現代の工芸分野の作品をご覧いただくもので、藩政期の工芸を特集した「いしかわの工芸　歴史の厚み～加州刀と加賀の工芸～」（会期：九月十二日～十月十八日）とあわせて、江戸時代から現代までの石川県の工芸を通覧できるという主旨です。

この期間の大きなトピックとして、国立工芸館の移転・開館がありました。日本海側初の国立館誕生ということで、全国的にも注目を集めています。この機会に当館の工芸作品もより多くの方に見ていただこうということで、急ごしらえではありましたが、本展開催の運びとなったわけです。

実のところ、このような状況下で「不要不急」と言われる美術館へ来ていただけるのかと不安でしたが、予想を上回る来館者数となり、大変ありがたく思っています。アンケートを拝見すると、工芸館とあわせてご覧になっている方も多く、工芸ファンの多さを改めて実感しました。今後も、石川ならびに北陸の工芸をいろいろな角度からご紹介して、工芸ファンのみなさまのご期待に沿いたいと思っています。

（会期：二〇二〇年十一月八日（日）～十二月二十日（日））

ミュージアムレポート
0才からのファミリー鑑賞会 オンライン

「0才からのファミリー鑑賞会」は、赤ちゃんも作品をみるという観点から、小さなお子さんと美術館で作品を楽しむ方法をご案内するイベントです。当館では二〇一六年度から、NPO法人赤ちゃんからのアートフレンドシップ協会・代表理事の冨田めぐみ氏を講師に迎え、継続的に開催してきました。しかし今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、当初予定していた対面での実施が難しくなり、オンラインで行うこととしました。当館で初めてのオンラインイベントでしたので、機材の調達や通信環境の整備に四苦八苦しましたが、なんとか大きなトラブルもなく開催することができました（小さなトラブルはたくさんありました）。

作品鑑賞の点では、やはり実物を前にした体験と比べることはできませんが、オンラインならではのメリットもありました。今回は十四組のご家族が参加されましたが、そのうち九組が県外の方で、なんとアメリカから参加された方もありました。また終了後のアンケートでは、後半子どもがぐずってしまったが、マイクをオフにして聞き続けることができたのでよかった、普段と違ってゆっくり説明を聞くことができた、といったご意見をいただきました。

今後も、対面とオンラインのそれぞれの特長を活かしながら、様々な企画を行っていきたいと思います。

（開催：二〇二〇年十一月二十日（金）・二十三日（月・祝））

2月前半の展覧会

2月7日(日)まで

・企画展　花木にみる 日本美の心
・新春優品選【前田育徳会尊經閣文庫分館】
・新春優品展【古美術】
・新春優品選【近現代工芸】
・書をあじわう【近現代書】
・優品選【近現代絵画・彫刻】

友の会　次年度申込案内

令和三年度の友の会会員を募集します。次号(三月・四四九号)に募集情報を掲載し、別途手続き書類をお届けいたします。館内での密を避けるためにも、**できる限り郵便振替での申し込みにご協力をお願いいたします。**

なお、新型コロナウイルス感染症の状況によっては、バスツアー、現地見学の中止など、例年通りのサービスをご提供できない可能性があります。何卒ご理解いただきますようお願いいたします。

◇会費　二、〇〇〇円
◇受付期間　令和三年三月一日(月)より開始
◇会員証の有効期限:令和三年四月一日～令和四年三月三十一日

2月の行事予定

■土曜講座　13時30分～15時　美術館ホール　無料

6日(土)　仏像は語るⅡ　副館長　谷口　出

※27日の土曜講座は中止となりました。

■映像ギャラリー　14時30分～15時30分　美術館ホール　無料

7日(日)
「美術のみかた　透視図法」(23分)
「極める・匠の世界　桐くり物に賭ける(木工芸・中臺瑞真)」(30分)

21日(日)
「世界・美の旅　レオナルド・ダ・ヴィンチ　～永遠の微笑み～」(30分)
「シリーズ北陸の工芸作家　石川の匠たち　煌めき　人間国宝　前史雄」(23分)

ご参加にあたっての注意事項

① 来館時にサーモグラフィによる体温チェックを行います。体温が三十七度五分を超える方の参加はご遠慮ください。
② マスクの着用、手指消毒の徹底をお願いいたします。
③ 参加時は受付名簿に氏名と連絡先をご記載ください。
④ 密集を避けるため、前後両隣の席を空けての着席をお願いいたします。
⑤ ホール内では会話を極力ご遠慮ください。

◆友の会特典

今年度友の会会員に限り、当館オリジナルポストカードをプレゼントいたします。(絵柄はお任せください!)
来月号の美術館だよりに同封いたします。お楽しみに!

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.52

《栃造筋違菓子器》とちづくりすじちがいかしき

口径 10.6×胴径19.5×高28(cm)
大正3年(1914)頃

筑城良太郎 ついき・りょうたろう
明治7年(1874)～昭和7年(1932)

これは木工芸作品、形は壺ですが菓子を収める五段重ねの器です。轆轤(ろくろ)を用いて、表面に飾りの筋を挽いており、筋の模様が変わるところで外すことができます。蓋の上には、渦巻き状の模様筋があり、一段目が細かい小刀筋、二段目がうねうねとした二種類の山道筋、三段目が一段目よりやや粗い鉋筋、四段目が細い筋の間を平らに広げた広糸目、五段目は太い筋の脇に細い筋を二本寄せた子持筋です。

壺状の形も轆轤で成形したもので、外側は木目が際立つ拭漆仕上げ、内側は黒漆塗りです。五種類の菓子を入れたか、菓子を五つに分けたのでしょう。筋挽は手に取って開け閉めする際、滑り止めになり、実用性も兼ねています。

作者の筑城良太郎は、明治七年(一八七四)加賀市(旧江沼郡山中町)に生まれました。江戸時代に蓑屋平兵衛が考案した、轆轤による筋挽をさらに究め、数十種におよぶ模様筋挽を創案したことで知られています。

髹漆の名工であった父善吉の勧めで、木地師の旭弥三吉に師事し、明治二十五年(一八九二)に独立しました。翌年、現在広く用いられている、拭漆仕上げを考案、子弟や同業者に伝授します。内外の博覧会で多くの受賞を重ね、大正6年石川県実業功労者賞を受賞しました。筑城の筋挽には、未だ再現できないものもあります。

当館公式ウェブサイト特集ページ「ハコをあけると」にて、五段すべて開けた様子をご紹介します。第5展示室特集「箱・はこ・hako　さまざまな素材とわざ」と併せてご覧ください。

次回の展覧会

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
遊戯具と香道具	古九谷・再興九谷名品展

会期:3月24日(水)～4月13日(火)

1F企画展示室(7・8・9展示室)
2Fコレクション展示室(3・4・5・6展示室)

第77回 現代美術展一日本画・工芸・書一
会期:3月27日(土)～4月13日(火)

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円(290円)
大学生　290円(230円)
高校生以下　無料
※(　)内は団体料金
2月1日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

2月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00 年中無休

2月の休館日は
8日(月)～10日(水)

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか?
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q-Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第448号(毎月発行)
2021年2月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。